

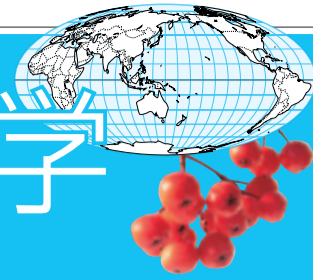
學報

学校法人 北海学園

北海商科大学

アジアの時代に、アジアを学ぶ。

Hokkai School of Commerce Newsletter



Vol.17

2014.12.20

発行:北海商科大学
編集:北海商科大学広報委員会
〒062-8607
札幌市豊平区豊平6条6丁目10番
TEL:011-841-1161(代)
FAX:011-824-0801
http://www.hokkai.ac.jp
制作:(株)ラボット

主な記事

- 3. オープンキャンパス ————— 2面
- 4. 交換留学生が出発 ————— 2面
- 5. 短期交換留学生プログラム実施 ————— 2面
- 6. レスブリッジ大学夏期海外研修 ——— 2面・3面
- 7. 外国語スピーチコンテスト結果報告 ——— 3面
- 8. 2年次所属学科決定 ————— 4面
- 9. LMSを利用した学びの支援の充実に向けて 4面
- 10. オフィスアワーの導入 ————— 4面
- 11. キャリアガイダンスと就職支援 ————— 4面
- 12. 北海道地域観光学会第1回全国大会 ——— 5面
- 13. MOS世界学生大会2014日本大会で表彰 — 5面
- 14. 留学だより ————— 5面
- 15. 「研究のいま」島津望教授 ————— 6面
- 16. ゼミ訪問 村松ゼミ ————— 6面
- 17. OB・OG NOW! ————— 6面
- 18. 開発政策研究所「北見研究会」開催 ——— 7面
- 19. サークルリーダー研修会 ————— 7面
- 20. フィールドワーク 加藤ゼミ ————— 7面
- 21. Photo Gallery [北海商科祭、体育祭] ——— 7面
- 22. 2014年度 後期公開講座開催 ————— 8面
- 23. 名誉教授称号授与 ————— 8面
- 24. 浅羽祭挙行 ————— 8面
- 25. 大学院生インタビュー ————— 8面
- 26. 新刊紹介 ————— 8面
- 27. 医務室から「二十代の健康」連載⑧ ——— 8面
- 28. 行事予定 ————— 8面

第9回北海商科祭開催。 テーマ ~ star train ~ 彩軌道



北海商科祭報告記

去る9月20日、穏やかな天気のもとで第9回北海商科祭が開催されました。多数の模擬店からは威勢の良い呼び込みの声が響き、学生たちの意気込みが感じられました。例年のように商科祭ならではの国際色豊かなメニューに加えて、パンケーキや豚汁などが新登場し人気を博していました。さらに、開店前から野菜直売所に行列ができるほどの盛況で、その後も家族連れのお客様などで賑わう祭りとなりました。

ステージでは多彩な企画が目白押しでした。まず、歌うま決定戦ブロックAで全員が見事なノドを披露していました。続いて、早押しクイズバトル!では名答や珍答に歓声が沸き、決勝戦は緊迫した戦いになりました。次いで、ダンスショーでは練習の成果を存分に発揮していました。その後も、かき氷の早食いや宝探しゲームで会場は大いに盛り上がりました。昼頃に雨が降りましたが、小一時間で止み胸をなで下ろしました。その雨のなかアーティストLIVE「KaRin」は根性のステージでした。YOSAKOIソーランでは、「舞とよひら」や「〜粋〜北海学園大学」などのチームが躍動感溢れる踊りを舞っていました。一方、校舎内では映画「トイ・ストーリー3」が上映され、ラストでは「うるっ」とさせられる素晴らしい企画でした。

日が傾いてきた頃、アーティストLIVE「ミルクス」とお笑いLIVE「ニッチェ」が登場し、掛け声や笑いが会場全体に広がりました。その余韻のなかで抽選会が行われ当選者が発表されました。最後に実行委員長の挨拶があり後片付けを終えて大学祭の幕を下しました。実行委員長や協賛企業との交渉に走り回った渉外部をはじめとして、各部の実行委員は一生懸命頑張ってくれました。ご苦労様でした。(田辺)



第9回北海商科祭を振り返って

大学祭実行委員長 商学科4年 及川 涼平



北海商科祭は今年で9回目を迎え、「star train—彩軌道—」をテーマとし、第1回商科祭からの「伝統」や「想い」を受け継ぎながら、彩り豊かな新たな大学祭を創り上げようという想いを込めました。新たな試みとして校舎内ではディズニー・ピクサーの名作「トイ・ストーリー3」を上映した「ミニシアター」、ステージでは「早押しクイズバトル」や「かき氷早食い」などの新たな企画に挑戦することができ、また商科祭恒例となっている野菜直売はJA道央「のっぽる野菜直売所」の全面協力により新鮮野菜の販売やじゃがいもの詰め放題などを行い、どの企画もご来場された皆様に楽しんで頂き、大盛況の中、無事フィナーレを迎えることが出来ました。最後に、委員長を経験し、多くの事を学ばせて頂きました。「仲間」というかけがえのない存在と共に商科祭の運営に携われたことに心から感謝しています。後輩達には次の商科祭でも「仲間」を大切にしながら活動してほしいと思います。

商学部長

阿部 秀明



入学 定員 認可 180名へ 増

平成27(2015)年4月の入学定員の増加に向け、文部科学省に収容定員増加の認可申請を行ってまいりましたが、このたび、平成26(2014)年8月28日付の文書において、文部科学省より正式に商学部入学定員30名(商学科20名、観光産業学科10名)、収容定員120名を増員することの認可を頂きました。今回の収容定員増の申請は、本学のこれまでの経緯と実績による約3倍の入学志願者の希望状況に対し、定員を増やすことで優秀な学生をより多く受け入れられるよう改善しようとするものであります。また、国及び北海道が求めるグローバル化に対応できる人材を一人でも多く育成することが社会の要請であり、同時に本学の社会的使命でもあるとの考えに基づいたもの

です。全国的にも定員割れの大学が半数を占める中で、今回の定員増申請は、予想以上に厳しいものでした。しかし、これまでの本学への社会的評価や受験生の定員増への期待感が申請書類のエビデンスに反映されたことで、留意事項も無く認可に結び付いたと言えます。これも一重に、これまでご支援・ご協力を頂いた道内高等学校の諸先生、保護者の皆さん、関係機関の方々のお蔭であり、深甚より感謝申し上げます。今後は、施設整備の充実を図るべく、教室・研究室の増設を行う予定であります。今後とも、本学への一層の理解とご支援・ご協力を切にお願いし、定員増認可のご報告といたします。

オープン キャンパス 開催



平成26(2014)年度のオープンキャンパスが6月29日の日曜日と夏休み期間中となる8月6・7日、さらに9月28日の日曜日、延べ4日間にわたり午前10時から午後4時まで本学において開催されました。

オープンキャンパス当日の全体説明会では、はじめに本学の学部・学科の概要が説明されました。それに続いてスライドを使いながら、カリキュラム・大学生活・海外留学・就職状況などに関する具体的な状況や特色、一般入学試験・大学入試センター試験利用入学試験・推薦入学試験などの各入試制度について、説明がおこなわれました。

また今年度は、恒例となった中国語・韓国語・英語の外国語会話学習体験や授業風景(録画)視聴、知的好奇心をそそる模擬講義の聴講、さらに学生によるゼミナール研究報告会の様子も、一部ですが見学できました。こうして来学者は本学での学びの一端を、より広く体験することが可能となりました。参加者アンケートの集計結果によれば、いずれも大変好評でした。

さらに、在学生の協力を得ておこなわれた「先輩によるアドバイス」や「キャンパスツアー」、教員が来学者一人ひとりの質問に懇切丁寧に対応するために設けられた個別相談コーナーでは、多くの参加者・来訪者を得ることができました。

ところで北海商科大学としての学生募集は、今年でちょうど10回目を迎えることとなりました。大学受験をめぐる状況は大きく変容しつつありますが、変化のなかにあっても受験生や社会の要望に応えるべく、これからの10年も引き続き内容の充実を鋭意努めてまいります。(堂徳)

交換留学生 が 出発

日本政府観光局の発表によると平成26(2014)年9月までの訪日外客数は、973万7,300人と前年度比26%増となり、昨年度と同様1,000万人の訪日外客を迎える見込みとなりました。台湾・韓国・中国・香港で約半数を占め、これからも増えていくと予想されます。

現在北海道には、7つの国・地域の10都市との航空路が開かれており、アジアの諸都市での北海道の人気はまだ続くものとみられます。一方、日本人の出国者は前年度をまだ下回っているものの、昨年は推定で中国には287万人、韓国には274万人の日本人が訪れています。

学生の海外留学を推奨している本学では、本年度も36名が元気に海外へ出発していきました。

まず、協定校への長期留学(約1年間)のために2年次以降の学生が中国へ2校3名、韓国にも3名が Semester 開始の前に出発しました。また、本年度はカナダのレスブリッジ大学夏期海外研修の派遣年度にあたり、本学から3年生2名、2年生5名が北海学園大学の学生と共に、8月8日から約1ヵ月間、語学のほか、文化交流プログラムでカナダの生活文化も学び無事帰国しています。

さらに、本年度の1年次後期から協定校への海外語学留学プログラムでは、中国(山東大学威海校・煙台大学)13名が8月27日に、韓国(大田大学校)10名が8月28日に札幌を出発しました。

グローバル人材の養成が、近年の大きなテーマになっていますが、語学だけがグローバル人材になるのではなく、主体性や協調性、責任感などの社会的スキルと異文化に対する理解と日本人としてのアイデンティティーが求められています。留学は、それらを得るよい機会です。どのような時期であっても、「語学力」だけでなく「異文化理解」や「価値観・考え方」の許容などと同時に「よき友人」を得て、有意義な留学生活を送ることを期待しています。(加藤)



8月27日に出発前の中国交換留学派遣学生



8月28日に出発前の韓国交換留学派遣学生

短期 交換留学生 プログラム 実施

カナダレスブリッジ大学との交流も、本年度で33年を迎えます。本年度は日本から学生を派遣する年にあたり、本学からも7名の学生が参加しました。

8月8日に札幌を出発し、同日に到着。滞在中お世話になるホストファミリーと対面した後、ホストファミリー宅でカナダの生活の第一歩を踏み出しました。

11日の月曜日にはオリエンテーションと歓迎昼食会、そして12日からは、午前中はESLで英語研修、午後からは課外活動と本格的に研修が始まりました。課外活動では、レスブリッジ市役所に市長を表敬訪問や博物館見学などの社会見学や、5ピンボウリングやコーンメイズなどの体験、そして学生自治会主催イベントなどが、さらに、週末はカナダでも有名な観光地であるバンフやウォータートンへの小旅行が行なわれました。

学生たちが行なった5ピンボウリングは、カナダが発祥といわれています。普通ボウリングのピンは10本ですが、5ピンボウリングは、サイズの小さいピンが5本で、1フレームで3投できるのが10ピンと違います。またコーンメイズは、北海道ではひまわりの迷路が有名ですが、カナダではとうもろこしの迷路です。このように同じ内容でも、国が異なると様子が違うことが学生にとっても楽しい学びになったようです。

8月29日の最終日には、午前中はこれまで学んだことを振り返って発表プレゼンテーションを行ないました。また、夕方からは修了式が行なわれ、学生たちは3週間に及ぶレスブリッジ大学での研修を終えました。学生たちからは、日本ではできない体験ができ、世界観がひろがった、成長できたという声があがりました。また、これらの経験を通して、自分自身や日本を顧みることができたであろうと思います。

来年度は、レスブリッジ大学の学生が6月に札幌へ研修に来道します。この研修の参加者だけでなく、すべての学生やその家族が、彼らを温かく迎えてくださることを期待しております。(加藤)



修了式後の集合写真

本年度も、交流提携校である中国山東大学威海校から、引率教員1名と男子学生4名を含む13名、さらに今年度初めて煙台大学の男子学生1名と女子学生2名を短期交換学生として受け入れました。

一行は7月8日に来日し、翌日から北見キャンパスで日本語研修の他、日本の生活文化について学び、7月16日からは、札幌で日本学の講義も受けるかたわら、7月21日にはNPO法人アジアの留学生等を応援する会のご協力、藻岩山登山などを楽しみました。

7月25日には、すでに交換留学生として来札している中国人留学生と一緒に、8月末から中国へ留学する日本人学生と合同の交流会を実施しました。当日は、それぞれの自己紹介を日本人学生は中国語で、中国人学生は日本語で行ないました。その中で、日本語や中国語を勉強している理由を発表しましたが、日本も中国も言語そのものに興味があるという学生が多かったのが印象的でした。そこまで到着きっかけは様々でしょうが、外国語への興味から、異文化への交流が始まっているということを再認識できました。その後のアイスブレイク(緊張を解くためのゲーム)の「挨拶ゲーム」では、お互いの名前を聞き取るゲームをしましたが、日本語と中国語が飛び交いに盛り上がりしました。

山東大学威海校と煙台大学の短期交換学生は、30日の修了式を経て7月31日に帰国しました。(加藤)



出発前、新千歳空港で夏期海外研修に向う本学学生と北海学園大学生、教職員 [8月8日]

レスブリッジ大学夏期海外研修 体験談

商学部2年 鍛冶田 寛史

平成26年度のレスブリッジ大学学生交換事業夏期海外研修は、8月8日から9月2日までの26日間、北海学園大学、北海商科大学、両大学合わせて14名によって行われました。主な研修の中身は、大学による特別な英語学習 (ESL) プログラムの受講、レスブリッジ市内の見学、観光などです。また、休日はホストファミリーやピアパートナーによく遊びに連れて行ってもらいました。また最後の2日間はバンクーバー市内を自由に回りました。市内の有名な水族館に行ったり、買い物や食事をしたりと非常に有意義な時間を過ごしました。今回の研修においてレスブリッジ大学の関係者やホストファミリー、ピアパートナーを始めとする現地の方々との交流を通じて、日本では得ることのできない多くの貴重な体験をすることができました。来年にはレスブリッジで出来た友人達を含む数名が交換留学生として北海学園に来るので、積極的に交流していくと同時に今度は自分達の住む地域の良さを伝えていきたいです。

今回の海外研修を通じて得たことを、北海商科大学の更なる国際交流の発展につなげていきたいと思えます。

■ 学生報告

海外語学研修(カナダ)について

商学部2年 又村 貴将

私が今回の1ヶ月間の交換留学で学んだことや体験したことはたくさんありました。まず語学研修と言っても、教室でずっと勉強しているだけではありません。いろいろな所に見学に行く機会を持ちました。一泊二日で遠出するツアーなどもありました。

初日早々から新鮮な体験でした。東京を昼に出発し9時間飛行機に乗っていたはずなのに、カナダについたとき外が明るくて、とても変な気持ちになりました。またカナダの街に着いて最初の感想が、改めて「本当に周りに外国人しか居ないな」ということでした。この後大学に行き一緒に行動してくれるpeer partnerと会って会話をしたときは、本当に全て英語で話していたので動揺してしまい、一瞬何もできなくなりました。その後ホームステイ先に行ってもそうした状況が何度か続き、一日中あたふたしていました。

生活に慣れてくると日本との違いがいくつも眼に留まるようになりました。印象的だったのは、コンビニがガソリンスタンドにあるということです。他にもバス停に時刻表が付いていなくて、これはとても不便でした。

今振り返ると、今回の留学は多くのことを学べ、人との繋がりも増えとても充実したものでした。また機会があれば色んなところに行きたいと思っています。



語学海外研修の大きな収穫

商学部2年 松浦 沙也加

海外の音楽や絵画、日本とは違う街並みなどに強い憧れを持っていた私は、当初海外への素朴な好奇心から留学に申し込みました。しかしカナダに到着後、すぐに週末2日間をホストファミリーと英語だけの環境で過ごすという日程や、ESLの授業についていけるか等、出発直前になると不安でいっぱいになりました。ところが行ってみると毎日が充実していて、ホストファミリーのお孫さんとも仲良くなれ、授業もグループワーク中心だったので、出発前の不安はすぐなくなりました。

私のホストファミリーは優しい老夫婦で、手料理もおいしくて、いつも私のことを気にかけてくださるとても素敵な家族でした。カナダの人は温かく、私のつたない英語も理解しようとしてくれて、私も自分の思いや考えを伝えようと努力できました。最初は所々の単語くらいしか聞き取れませんでした。帰国するころには大分耳が慣れ、英語を理解できる喜びを味わうこともできました。

チップ制度など日本にはない習慣に戸惑うことも何度ありましたが、海外の文化・習慣にも触れられて、想像以上に得るものが多かったように感じます。カナダの豊かな自然の中で楽しく英語を学べ、この留学がなければ出会えなかった仲間とは帰国してからも遊ぶくらい仲良くなれたのも大きな収穫でした。

これからも英語の勉強を続け、いつかお世話になった人に感謝の気持ちを伝えに行きたいと思えます。約4週間という短い期間ではありましたが、たくさんを吸収して個人的にも成長できたと思えます。今回留学に行ったことで、次は長期で留学し、将来は海外に住みたいと思うようになりました。



外国語 スピーチ コンテスト 結果報告

中国語スピーチコンテストで入賞

11月9日に実施された2014年度全日本中国語スピーチコンテスト北海道大会(北海道日中友好協会主催)に、本学から竹村航平君(商学科4年)、高島直人君(商学科2年)、高橋真生さん(観光産業学科2年)、遠藤かおりさん(観光産業学科2年)、本間聖利絵さん(商学部1年)が出場しました。高島直人君が見事に弁論部で最優秀賞、竹村航平君が札幌友好都市瀋陽市長賞、遠藤かおりさんが朗読部で2位、高橋真生さんが暗唱部で2位に輝きました。1年生の本間聖利絵さんが出場したのは始めてではありますが、暗唱に挑戦して、その綺麗な発音と流暢さで、聴衆から高い評価を博しました。高島君は、北海道の代表として、平成27(2015)年1月に開催予定の全国大会(東京)に出場することになります。本学の学生は出場して以来4年間連続最優秀賞を獲得しました。

高島直人君は、今年5月の「漢語橋」世界大学生スピーチコンテスト北海道予選大会で最優秀の好成績をあげ、中国で開催された本戦にも出場しました。2年生で世界大学生中国語スピーチコンテストに登場した学生は稀で、本学において、今まで5人が本戦に出場しましたが、2年生で出場したのは、初めてのことで。 (蘇)



全日本中国語スピーチコンテスト北海道大会



北海道韓国語弁論大会

韓国語弁論大会の結果

駐日韓国文化院(東京)が実施した「韓日交流エッセイ・フォトコンテスト」において、本学の北林育子さん(商学科2年)が韓国語エッセイ部門で入選、岡野日香さんが日本語エッセイ部門で入選を果たしました。このコンテストは今年初めて実施されるもので、日本全国から852通もの応募がありました。そのうち韓国語エッセイ(一般部門)は81件、日本語エッセイ(一般部門)は206件を数え、北林さんと岡野さんはこの激戦を制して、見事入賞を勝ち取りました。

去る10月25日、北海道近代美術館にて第16回北海道韓国語弁論大会(主催:札幌韓国教育院・北海道韓国学園)が開催され、本学からは予選を勝ち抜いた田村里奈さん(観光産業学科2年)が出場しました。田村さんは「韓国と日本の未来」というテーマで元気よく発表を行い、見事、奨励賞に輝きました。(水野)

中国語入賞原稿(日本語訳) ● 高島直人君「外面的世界很精彩」●

私が中国語の勉強を始めてから約1年半、この間に中国へは二回行きました。一回目は北海商科大学の交換留学生として、二回目は「漢語橋〜世界大学生中文比賽〜」の選手としてです。これらの経験はどれも私自身を大きく変える経験となりました。

私はこの大学に入学する以前、中国を含む外国への興味があまりありませんでした。しかし1年生になり中国語を選択し、留学を含め次第に中国人の方と交流する機会が増えていきました。その中で私は少しずつ語学や国際交流の楽しさを実感していったのです。留学が終わり帰国してから、私は漢語橋に参加し優勝を飾ることができました。しかし私の実力は十分なものとは言えず、まだ聞き取ることが出来ない言葉もたくさんありました。再び中国へ行っても、漢語橋の選手同士の会話が理解出来なかったり、自分の言いたいことをなかなか伝えられなかったのです。日本語を話せる外国人は多く、初日から一週間の間のルームメイトであったドイツ人の友達に日本語を話せました。彼以外にもスペインやブラジルの友達も日本語を話せました。ブラジルの友達に関しては中国語や日本語を含む7か国語を話すことができ、彼らはまだ戸惑うことの多かった私を積極的にサポートしてくれました。またこんな出会いもありました。選手の中に一名、ひときわ目を引くとても綺麗な女性がいきました。話を聞いてみるとロシアから来た方でした。私は積極的に会話を試みましたが、自分の実力不足が目立ち悔しい思いをしました。これらの経験の中で私は二つの目標が生まれました。

一つ目としてまずは現在学んでいる中国語をさらに勉強して、もっと自然に会話出来るようになること。そして二つ目は中国語以外にも外国語を勉強してみたいということです。私は中国で、たくさんの外国人の優しさに触れました。自分も様々な国の方とその母国語を使った会話をし、日本にいる留学生や観光客の助けになりたいのです。例えば私たちの大学の中では韓国語を勉強し、韓国語留学生との交流も出来ます。他には隣接する北海学園大学にもロシア人留学生がいると聞いたことがあります。このように外国人と交流する機会はたくさんあります。近年日本の若い人の外国に対する関心は薄れていますが、私は外国語を学びそして外国の人々と会話や交流することが、どれだけ楽しくて財産になるかを知っています。皆様も考えてみてください。一つの国の言葉を学ぶだけでその国の人々とコミュニケーションがとれる、自分が今まで見たこともない世界に出会えるのです。語学の幅を広げること、自分の世界を広げることに繋がるのです。皆様もぜひこの感動を一度体験してみてください。

韓国語入賞原稿(日本語訳) ● 田村里奈さん「韓国と日本の未来」●

私が今だからこそ日本と韓国の同世代に伝えたいことは、もっと旅行や留学、交流などをして両国共に認識の違い、誤解を正していき今よりも両国を理解する必要があるということです。

日本では韓流ブームが起き、韓国に好印象を持つ人が多くいる一方で批判的な人も少なくはありません。その理由は、ニュースや新聞での情報、政府同士のやり取りが原因だといえます。毎日のように流れているニュースや新聞での韓国の情報は良い情報がほとんどありません。また、私の知り合いからは、韓国に行ったら危険だという話を聞かされたこともありました。そのため私が初めて韓国に旅行に行ったときも、それらの情報しか得ていなかったため楽しみよりも不安の方が大きかったです。しかし、実際に韓国に行ってみて現地の人と話をしたとき私が想像していた韓国と自分で目にした韓国は違うものがありました。わからないことがあれば親切に教えてくれたり、韓国人の人から話しかけてくれたりと、話しやすい人たちが多かったのです。

韓国でも日本の印象は良くありません。韓国が日本を批判する理由は歴史が関係しています。韓国は両国の歴史を教育していくにあたって、日本を否定的に教育しているため、韓国人は今でも日本に恨みや敵対視をしている人が多いです。そのため、韓国人は日本人と交流を持った時初めて日本の良さに気付く人が多いという話を聞きました。

このように聞いた話だけで両国を理解しようとするそれは無理です。話だけでは認識の違いや誤解は解けることなく、さらにひどくなるだけです。重要なのはイメージではなく自分で身をもって体験することです。「百聞は一見に如かず」ということわざにもあるように、聞いた話だけで良い国や悪い国と判断するのではなく実際に旅行や留学、交流などをしてみて、自分の目で確かめる必要があります。まずは、個人個人と触れ合っ小さいことから理解することから始めることが大切です。小さいことの積み重ねが国を理解することに繋がります。それができて初めて両国の良さに気付くことができます。そして認識の違いや誤解がとけて今よりも良好な日韓関係を築くことができるのです。

2 年次所属学科 決定



学科選択説明会 [5月20日]

平成23年度入試から導入された学部入試により、今回で3回目となる2年次・第3セメスター開始時の所属学科選択が行われました。

これまでと同様に、学生の希望を最大限に考慮し、各学科の定員を勘案して、極端に志望者が偏った場合は学業成績を基準として所属学科の決定を行うことを周知しながら作業を行いました。

まずは3月下旬の新2年次教務ガイダンスで所属学科決定までのスケジュールと選考基準を確認し、両学科の教育内容を説明しました。

5月20日には第1回目の学科選択に係る説明会を実施し、6月10日から6月19日にかけて専門ゼミナールの見学会を実施し、7月1日に第2回目の説明会を行い、所属学科決定申込用紙を配布しました。

学生の希望に沿って、2年次生172名のうち、商学科107名、観光産業学科65名の所属が決定し、9月11日に発表しました。(柳川)

オフィス・アワー の導入に ついて

本学では、これまででも学生からの相談について、教員が研究室在室中に限り、個別に対応してきました。

このたび、教育の特色である少人数教育の充実の一助となるように、全学的にきめ細やかな学習支援の体制づくりとして、オフィス・アワーを導入しました。

導入初年度は、専任教員の授業を受けている学生からの授業に関する内容の質問や相談に応じるため、担当教員が必ず研究室に待機している専用の時間帯としてオフィス・アワーを位置付け実施してきました。導入後の実績を踏まえ、オフィス・アワーを中心とした学生相談支援体制をより充実させていくことを検討しています。(柳川)



LMS を利用した 学びの支援の充実に 向けて

本学では、大学における授業運営を効率よく支援するLMS (Learning Management System) であるCourse Power (コースパワー) を昨年度より導入し、学びの支援体制の充実を図ってきました。

導入初年度は、2年次必修の専門基礎科目であるコンピュータ・リテラシー I・II を中心に利用を開始しました。

今年度になり、通常の講義科目にもその利用範囲を広げ、Course Power を利用した講義資料の提示や、レポートの提出を行っています。本学では、学生が自宅からでもスムーズに教材を得ることが出来ることにより、自学自習に繋がっていくこと他、担当教員とのコミュニケーションツールとして、さらに授業中の理解度を高めるアンケートなどに利用されていくことを期待しています。(柳川)

8
9
10
11

平成28(2016)年3月卒業予定の学生の就職活動が、従来の12月1日から3カ月遅れの平成27(2015)年3月1日に解禁されます。本学でも、それに合わせて就職指導のスケジュールを立てて準備を進めております。学生の将来は就職活動の成否に大きく左右されるため、早くから学生の就職支援のために北海学園大学との共同で、就職支援システム「ミナトコム」を導入し、多数の求人情報から職種別や勤務地別などの検索ができるようにしています。また、相談体制を強化するため、キャリア支援センターによる個別指導を実施しております。

既に3年生に対しては4月以降、就職活動の心構えや準備をはじめ、職業適性検査、SPI模擬試験、企業・業界の研究、インターンシップ制度など、就職に直結するガイダンスを毎月実施してきました。4年生には、フォローアップセミナーを開催し、逐次求人情報を開示し、個別の就職支援を積極的に進めております。

こうした包括的な支援体制のほか教科履修単位の中に専門キャリアアップ科目(APQ)として情報管理論、旅行業務論、社会行政論、税務会計論、通商実務論、PAL(中国語、韓国語、英語)、職業指導などを配置し、実務にも役立つよう配慮しています。

就職活動を乗り切るにはまず、自分を知り、自分の熱意をいかに相手に伝えることができるかにかかっています。就職情報が多い中で、それに惑わされずに自分で納得がいくまで調べることが大切です。本学では就職支援に対して十分な体制をしいているので、最後まで自分を信じて諦めずに目標に向かってチャレンジしていただきたいと思います。(菊地)



4年生対象北海学園大学との合同企業説明会 [9月13日]



3年生対象学内就活イベントLIVE Voice (北海学園大学と共催) [12月6日]



キャリア・ガイダンス と就職支援 について

北海道地域観光学会第1回全国大会の開催

本年7月26日(土)に北海商科大学(3階・4階)において“北海道の着地型観光と産・学・官・市民連携”を大会テーマとして「北海道地域観光学会第1回全国大会」(研究発表、基調講演、シンポジウム、北海道観光商品に関する学生企画コンテスト、総会など)が開催されました。以下簡単にご紹介します。

1) 研究発表: 予想を上回る20件の研究発表があり、2会場に分けて開催されました。情報、交通、インバウンド、推進組織、産業・ビジネス、人的資源など多様な角度から地域観光振興を考察した発表がなされました。

2) 基調講演: 「これからの観光戦略-Towards 2020」のテーマで、西澤利明オーストラリア・クイーンズランド州政府観光局長による基調講演が行われました。成功事例としてのオーストラリアおよびクイーンズランドにおける取り組みについての説明、オーストラリアからみた日本の観光の感想、観光戦略の在り方について話された後、①観光は平和産業であること、②自然・文化・伝統の継承が重要であること、③新たな魅力の創出が必要であること、④関係各所の一体となったプロモーションが必要であることがまとめとして示されました。

3) シンポジウム: 「北海道の着地型観光と産・学・官・市民連携」をテーマとしたシンポジウムが開催されました(話題提供: イアン・ブレイシア駐札幌オーストラリア領事、北山憲武前北海道観光振興機構専務理事、中鉢令児北海商科大学教授、司会: 伊藤昭男北海商科大学教授)。シンポジウムでは、北海道から海外へ向けた観光に関する情報発信が不十分なこと、観光予算など取組むための基盤に対する力の入れ方が不十分なこと、観光が様々な機能と主体から成るシステム産業と捉える視点が欠けており、それが効果的な観光振興へとつながっていないことなどが話し合われました。

4) その他: 本学会大会に合わせ、「第1回学生が企画する北海道観光商品企画コンテスト」が同時開催されました。これは学生が1泊2泊のユニークな観光商品を事業の採算性も考慮に入れて提案しあうもので、企画から審査まで全て学生によって実行するコンテストです。北海商科大学を中心に11件の応募があり、最優秀賞(1件)、優秀賞(2件)がそれぞれ本大会終了後の懇親会にて披露されました。また本大会においては老朽化の進む北海道開拓村文化財の保護を目的に受付にて募金活動が行われました。(伊藤)



写真左上: 西澤利明氏による基調講演 右上: 本学学生による研究発表 左下: シンポジウム 右下: 学生が企画する北海道商品企画コンテストの入賞者

上記基調講演およびシンポジウムの骨子は『開発こうほう』(北海道開発協会発行)2014年10月号42-45頁に掲載されています(次のURLからご覧ください: http://www.hkk.or.jp/kouhou/file/no615_info-2.pdf)。

また『北海道地域観光学会誌』(電子ジャーナル)創刊号がアップされています。(<http://www.hokkai.ac.jp/hokkaidotourism/onlineJournal/main/index.php>)あわせてどうぞご覧ください。

MOS 世界学生大会 2014 日本大会で本学学生が表彰される

6月20日(金)に東京国際フォーラムで「MOS/ACA世界学生大会2014」日本大会 表彰式が開催され、本学商学科4年小田樹里亜さんが、大学・短期大学部門Excel第10位と、Word第6位にそれぞれ表彰されました。

小田さんは、これまでに資格取得のため開講されている専門キャリアアップ科目である情報管理論I・II・IIIを学び、セメスター終了後のMOS試験においても高得点を獲得してきました。

また、教職課程も受講しており、講義と並行して熱心に勉強をされ、今回の素晴らしい結果となりました。(柳川)



表彰式で株式会社オデッセイコミュニケーションズ出張所(てばりかつや)代表取締役社長、小田樹里亜さんと。

留学だより

商学部1年 井口 まい ● 中国煙台大学留学

私たちは8月28日から中国山東省烟台市にある煙台大学で留学生生活を送っています。煙台大学には北海商科大学の先輩や日本語の話せる学院生がいっぱい、私たちは助けを借りながら日々楽しく生活を送っています。中国に来た当初は、中国の文化や食事に慣れるのが大変でした。また買い物をするときや道を聞くときなど、中国語がうまく話せず困りました。日本で勉強してから中国に来ましたが、発音が現地の中国人に伝わらず、辞書を使うこともしばしばありました。しかし約3ヶ月間中国での生活を送り、私たちの語学力は大きく変化しました。以前は伝えることが難しかった言葉が中国人と一緒に勉強すること、食事をするにより今は伝えることができるようになりました。10月に私たちは同じ山東省にある青島市へ旅行に行きました。そこには多くの旅行者がいて賑わっていました。中でも小魚山公園の景色と五四広場の夜景はとても印象的でした。さらに私たちは、多くの外国人と同じクラスなので毎日いろいろな国の外国人と交流しています。この経験は留学生活でしか味わえないことだと思うのでとても充実しています。残り2ヶ月間悔いの残らない留学生活を送りたいと思います。



写真左: 煙台大学 青島ビール博物館で 写真中: 山東大学威海校 学生食堂 写真右: 大田大学校 運動会での集合写真

商学部1年 富田 天智 ● 中国山東大学威海校留学

8月末から始まった中学語学留学も残すところは2ヶ月余りとなったこの頃、段々と気温も下がり、この山東省にも冬が訪れようとしています。半年間に渡る留学生活の締めくくりに向けて、季節の移り変わりと共に少し早いですが今までの生活を振り返りました。

まず学習について。私達は4科目の講義を4人の先生から受けています。その内1人は日本語を話せる先生で、非常に良くしていただいています。しかし、私達が甘えすぎて、学習が遅れることもありました。そのほか3科目は講義全てが中国語ですが、学習が進むにつれ少しずつ分かるようになっていきます。学習については各々学習をしっかりしたなら問題はないと感じます。

次に交流について。私達は宿舍の外に中々出ず、中国の学生との交流は殆どありませんでした。最近になってようやく少しずつ増えていますが、それにしても遅すぎたと反省しています。彼らは非常に親切で、日本語科の学生でなくても日本が好きという人が多いです。なので、恐れずに積極的に交流を図るべきだと思います。また、外国人留学生に向けた中国文化体験活動も行われており、やろうと思えば幾らでも交流の糸口は見つかります。しかし、それらは彼らの側から来てくれることは少なく、全て私達次第になります。留学とは単なる勉強だけでなくその国の全てを見聞きし体験するものだと感じました。残り2ヶ月、出来るだけ多くのことを吸収したいと思います。



商学部1年 岩井 朱里 ● 韓国大田大学校留学

初めての授業はクラス分けの試験、次の日からは読み書き、聞き取り、会話、文法を学び、昼食後5時半まで自習時間という1日です。先生方の授業が受けやすく、皆楽しみながらも真剣に授業に参加しています。水が合わなくて最初の何日間はお腹を下す人もいましたが、少しずつ環境にも慣れてきています。韓国生活の中で私たちのサポートしてくれるパティの発表で緊張したり、そのあとの歓迎会もすごく楽しかったです。9月後半は運動会があり、どの競技でも日本人留学生を中心となり活躍しました。フードフェスティバルという外国人留学生達が各国の代表的な料理を作って大学内でお店を出すという行事もありました。日本人留学生は、いももちなどを作って人気賞を獲得し、1年生でk-popを踊って披露したり積極的に行事に参加しました。10月下旬には学祭があり、韓国で有名なガールズグループなどが来てとても盛り上がりました。学祭を通して日語日文学科の韓国人の先輩や友達と一緒に、自然な韓国文化や韓国語に触れたりしてとても良い機会でした!

初めてのテストもありました。範囲は教科書1冊分など日本では経験したことのないテストで、皆徹夜で必死に勉強しました。全員で生活や情報を共有していているため、充実感や達成感が大きいです。学習面などは個人差がありますが、それぞれ留学の中で学んだ何か大きな物を日本に持ち帰ることができると思います。



日本を支える地域の暮らしと産業

ここ最近、「地域の暮らしと産業」に関することを研究テーマにしています。もともと、医療や福祉といった、いわゆる「社会的共通資本」に関するマネジメントを研究してきましたが、そうしたものも含めた地域の暮らしと、それを支える産業について、関心が広がってきました。これは、東京から北海道というローカルな場に研究拠点が移ったことと無関係ではないでしょう。

東京には人や物や情報があふれていますが、東日本大震災は、そうした豊かさが、実は地方の人々の活動に支えられていたことを、明らかにしました。私も、震災を東京で迎えた経験から、東京の豊かさの幻想に気付かされた一人です。日本を支えているのは1,300万都市の東京ではなく、間違いなく、その影に隠れたローカルな地域だと思います。こうした点から、地域の暮らしと産業について、深く関わっていきたくと考えています。

今年から、北海道の産業のうち、ワイナリー事業について調査を始めました。日本産のワインというと歴史的に山梨県や長野県などが有名ですが、近年では、北海道のワインが高く評価されています。北海道は気候風土が、北フランスやドイツのように冷涼であることから、日本においてヨーロッパと同じようなワイン用ぶどうの栽培が可能な唯一の地域とのことです。事実、余市町のワイン用ぶどうの生産量は日本一であり、そのぶどうは、本州にも出荷されています。

業界関係者の間では、「ビールは工業、ウイスキーは家内制工業、ワインは農業」と言われています。それほどに、ワインはぶどうのよしあしが決め手になります。同じ品種のぶどうでも、その土地その土地の違いや、収穫年の違いなどが、それぞれ異なったワインを作り出すこととなります。したがって、ワインはウイスキーやビールとは異なり、二度と同じものを作ることができないという性質を持つ飲料です。ワインは、その地域の土壌、気候、人々の営みと言った、その土地固有の風土が詰まった、極めて地域の色合いが濃い産物です。

こうしてみると、一時期の「地ビール」ブームが定着しなかった理由もうなずけるのではないのでしょうか。ビールは「工業」と言われるように、標準化が前提になりますので、その土地の固有性が反映されにくいのです。「地ビール」というのはある種の形容矛盾であるとも言えるのではないのでしょうか。

アメリカのナバ・ヴァレーは、いまでは世界的に有名はワイナリー集積地ですが、今のような姿を達成したのは、1965年から95年の30年間の出来事です。それまでは、広大な小麦畑が広がっていたそうです。現在、ナバ・ヴァレーのワインは世界各国に輸出され、また、ここに滞在してワインを楽しむワイナリーツアーにも世界各国から人々が集ります。

北海道は、日本のナバ・ヴァレーになることができる潜在能力を備えた地域であると思っています。今後何年かは、この可能性について研究してまいりたいと思っています。

「研究のいま」

島津望教授



余市町のOcciGabi(オチガビ)ワイナリーのぶどう畑(写真上)と、醸造棟とレストラン(写真下) [2014年9月]



15

16

17

ゼミ訪問

村松 祐二教授
コマース研究ゼミナール

経済や社会のグローバル化、情報化が進むなか、商学科では変貌しつつある現代ビジネスに関する専門的知識を幅広く学習します。それらの理解をさらに深め、習熟度を高めるために、2年生後期(第4セメスター)からはコマース研究ゼミナールが開講されます。今回はその中から村松祐二教授のゼミナールを訪ねました。

村松教授の専門は企業経営です。グローバリズムや環境問題を視野に入れ、自動車産業の経営研究に長く取り組んできました。さらに中小企業の経営問題も、もう一つの研究テーマです。村松ゼミでは、様々な現代のビジネスを企業経営、特に経営戦略の視点から考える訓練を通し、ビジネスの様々な知識の習得を目指しています。同時にそれらを生きた学問として、目の就職活動や社会に出た後のための応用力を向上させることも目標にしています。



今回のゼミ訪問では、テキストである吉原英樹ほか著「ケースに学ぶ国際経営」(有斐閣)の内容を、全員が丁寧に読み解いてゆく方式で授業を進めていました。このテキストは、多くの経営事例を取り上げながら、海外に進出する日本企業の国際経営の実態を中心に、成長が著しいアジア等の新興国の動向などもふまえた上で、その経営戦略についても詳しく解説して

います。取材に訪れた日の授業の内容は、試行錯誤を繰り返しつつも優れた戦略で経営のグローバル化を進めてきたトヨタ自動車のケースでした。

優れたケーススタディー(経営事例の分析や検討)には、企業活動を抽象的なものではなく、その組織の実態や経営戦略などを具体的により身近に理解できる強みがあります。例えば、私たちが日常にげなく手にしている商品も、ビジネスの基礎的な知識がなければ、なぜ手にすることができるのか理解できません。村松教授はゼミの狙いを「日常生活に不可欠な商品(財やサービス等)を生産、販売するために、その企業がどのように市場の変化に向き合い、効率的な経営を行っているかを、具体的に学び理解することにある」と言います。

村松ゼミに在籍する学生は、2年生が10人、3年生が10人の計20人で、人気ゼミと言われています。第4セメスターから継続して履修している、現在3年生の安杖希さんに人気の秘密を聞くと「就職活動に強いことです」と即答が返ってきました。また、「毎週学習のモチベーションを高めてくれることも魅力の一つです」と語ります。事実、村松ゼミは上場企業や道内有力企業、地方公務員上級職などに、多くのゼミ生を送り出してきた実績を持っています。そのためゼミでは授業に加え、経済ニュースに日常的に接し、内容を抵抗なく理解できるよう指導しています。また特徴的なところでは、情報の取捨選択やひらめきを生かすための「就活ノート」作りも指導しています。村松教授は「こうした努力や身につけた習慣は、就職活動でも大きなリターンが期待できる」と言います。

OB・OG NOW!

橋口 友和

●斜里高校教諭 [総合学科知床・産業系列担当]



北海学園北見大学商学部観光産業学科を平成11年に卒業し、北海道留萌千望高等学校期限付教諭、初任校として北海道ニセコ高等学校を経て現在北海道斜里高等学校で2年目を迎えています。

初任校のニセコ高校では、大学で得た観光学の知識を活かし、観光リゾートコースの生徒へ「観光学基礎」をベースに、地域産業の意義や役割を理解させ、観光の各分野に関する知識と技術の修得、産業界として必要な能力と態度の育成に力を注いできました。斜里高校総合学科では、新たな系列である「知床・産業系列」の立ち上げに携わり、ニセコ高校で得た経験と地域性を考慮し、地域コーディネーターとして活躍するために必要な心構えや理念、知識・技術を習得し、ホスピタリティマインドやサービスマナーを身につけ、自然観光に優れたスペシャリストの育成を目標に、現在カリキュラムを作成しているところです。

高等学校における観光教育は、まだ完全には確立されていない教科です。しかし、北海道の産業にとって「観光」は欠くことのない重要な産業です。また、観光を学ぶことの強みは多面性にあります。中でも対人関係で最も重要な「ホスピタリティ精神」が身につくところにあり、高等学校で学ぶ意義はあると考えます。試行錯誤を繰り返しながら、北海道の観光事業に貢献できる人材の育成に努めていきたいと思っています。

商業教諭で観光を専門に教授できる「人材」は少なく、貴学で学び教諭を目指すことは大変意義があり、観光を教えることができる後輩たちが貴学から輩出されることを切に願っています。



斜里高校での橋口さんの授業風景

北見研究会開催

北海商科大学開発政策研究所

北海商科大学開発政策研究所は10月24日、北見市北光の北海学園北見校地で、「北見広域圏の観光振興と魅力ある地域づくり」をテーマに、北見研究会を開催しました（プロジェクト・リーダー菊地均教授）。

冒頭の挨拶で、同研究所副所長の大内東教授が「本格的な観光情報化社会を迎えるに当たり、旅行形態は個性化・多様化が中心となり、目的志向やテーマ性のある高付加価値型の旅へと大きくシフトしている」と現況を訴えました。

北見研究会では北田久志国土交通省北海道開発局網走開発建設部次長、佐々木一郎財務省北海道財務局北見出張所所長、浦昌哉北見市役所商工観光部部長、榊井文人北見工業大学准教授などをはじめ、本学からは伊藤昭男、加藤由紀子の両研究員が発表し、着地型観光と地域づくりを巡り活発な討論が交わされました。特に、この分野は、産業遺産、歴史的町並み、イベント、水族館・博物館・美術館、自然環境資源、食文化、温泉施設など、良質で優れた魅力が備われば、国内外を問わず旅行者は必ずやってくる」と報告され、北見広域圏を基盤とし地域づくりと密接に連携する「着地型観光」が、今後の旅行市場を牽引していくことが提案されました。

同研究所では地域の観光をテーマに今後も年一回、北見研究会を開催する予定です。
(菊地)



開発政策研究所副所長大内東教授の挨拶

サークルリーダー研修会を実施

8月7日(木)～8日(金)の日程で、第4回北海商科大学サークルリーダー研修会がNTT北海道セミナーセンターで開催されました。

1つ目のプログラムは、北広島市立西の里中学校校長の吉川雅樹先生によるご講演「リーダーに求められる資質とその役割」でした。先生は、まずリーダーシップの目的・方法、リーダーシップスタイルについて説明されました。次いで、集団内でのトラブルは活性化に向けた契機になることを指摘されました。最後に、活発な集団を形成するためのリーダーの心得を話してくださいました。2つ目は、新篠津村立新篠津小学校教頭の渡邊琢真先生による「コミュニケーショントレーニングの指導」でした。始めは複数個に分割された絵を復元する、情報伝達トレーニングを行いました。続いて、メンバーの考えを如何に全体の意見として集約するのか、すなわち合意形成に関わるトレーニングでした。

その後、「サークル活動の活発化」をテーマにグループ討議を行い、熱心な議論に基づく成果を発表しました。学生諸君が研修会で得たことを各サークルで発揮し、活発な運営を実現させるよう期待しています。今後も研修会が継続し発展して行くことを願っています。(田辺)



フィールドワーク 加藤ゼミ

6月13日に、豊平まちづくりセンターのある豊平会館で「豊平の歴史講演会」が行われ、社会文化ゼミナール（加藤ゼミ）の学生12人が参加しました。この催しは、本学のキャンパスがある豊平地区町内会連合会の主催で開催されたものです。講師は町内会連合会の会長であり、長年北海学園大学の学報に、豊平の歴史を寄稿いただいている歴史研究家の中川昭一先生。加藤ゼミでも、学生たちのゼミの成果報告会にお越しいただき、学生たちの発表に講評をいただいています。

当日は、キャンパス近くの国道36号線（豊平3条及び4条8丁目）上に昭和42(1967)年に建設された豊平横断歩道橋の撤去をきっかけに、豊平地区の交通の歴史を学ぶという内容で、当時の写真や資料を見ながら豊平地区の住民の皆さんと一緒に講演会を拝聴しました。

キャンパスのある豊平地域は、早くから交通の要所であり、安政4(1857)年には豊平川の渡し守として、志村鉄一が永住しています。大正7(1918)年には定山溪鉄道が開通し、学生が利用する東光ストア豊平店の場所が豊平駅になりました。さらに、市電の豊平線が昭和4(1929)年には豊平駅まで延伸しました。市電豊平線は昭和46(1971)年に廃止されましたが、交通の移り変りを歩道橋はずっと見守り続けてきたのです。学生たちにとっては、興味のある内容で、この講演会の後、中川さんに再度いろいろな話を聞いたグループもありました。

加藤ゼミでは、テーマに対して、知識、汎用的スキル、態度などを、統合的に展開していくことに主眼を置く学習メソッドであるPBL(Project Based Learning)で、「豊平を知るプロジェクト2014」を実施しました。このプロジェクトで、学びの充実をはかり、地域に目を向けることによって今後のキャリア形成に役立ててもらいたいと考えています。(加藤)

豊平まちづくりセンターで行われた「豊平の歴史講演会」



Photo Gallery



北海商科祭 2014・体育祭 2014 冬

東アジア秩序の再考 が開催される

2014年度 後期公開講座開催

北海商科大学公開講座を上記の全体テーマの下で開催しました。

- 日時：平成26(2014)年10月4日・10月11日・10月25日・11月8日・11月22日
(全5回 10:30~12:30)
- 場所：北海商科大学8階会議場
- 参加対象：一般市民(含む学生)

本学の公開講座は平成19年度より前期・後期の年2回で開催し、本年度で8年目を迎えています。これまで「アジアの時代にアジアを学ぶ」という本学の特色ある教育に照らして東アジアの知的関心を高めるべく実施してまいりました。幸い毎回多数の参加者(各80名程度)があり、恒常的な受講者も多数を数え、すっかり定着した感があります。今期は混迷する東アジアおよび世界情勢を鑑み、あえて共通理解に基づく東アジア社会の進化を期待して、「東アジア秩序の再考」のテーマを掲げました。また、地域振興ばかりでなく、地道ながらも世界平和に結びつく取組である国際観光・交流の取組を紹介する講演も含めました。

講座が単に知識の習得にとどまらず、日本を含めた東アジアひいては世界の人々の共通認識・相互理解および交流へとつながることを期待しています。これからも多くの方々のご参加を期待しております。

(伊藤)



22

23・24

25・26・27

28



写真右：第一回公開講座講師の中国社会科学院・虞国学研究院 写真左：第五回公開講座講師の淵野伸隆ニセコ町商工観光課商工労働係長・観光圏推進係長



平成24(2012)年3月付をもって退職された大前博亮先生の永年に亘る教育研究、大学運営のご功績に対して、本学名誉教授の称号が森本正夫学長より授与されました。

昭和49(1974)年、北海道大学大学院農学研究科博士課程単位取得、昭和52(1977)年、旧北海学園北見大学商学部(短大含む)に勤務されてから勤続34年、学生部長、就職部長、入試部長、学部長などの役職を歴任され、旧北見大学時代と北海商科大学の功労者として大変なご尽力を重ねて頂きました。



おおまえ ひろあき 大前 博亮 名誉教授(森本正夫学長と)

名誉教授の 称号授与

浅羽祭 挙行 される



10月22日に挙行された浅羽祭参列者の皆さん

学校法人北海学園主催による平成26(2014)年度浅羽祭が10月22日に執り行われました。浅羽祭は本学園創立功労者である浅羽靖先生の名を冠し、この1年間に逝去された北海学園教職員ならびに学生・生徒の御霊を、ご遺族・関係者参列のもと慰霊しているものです。

訃報

北海学園北見大学前学長 桃野 作次郎(94歳)
平成26年9月26日 逝去
本学在籍期間 昭和61年4月~平成3年3月

I N T E R V I E W

●大学院生インタビュー●



後期入学の大学院生。左から周唯さん、毛幸子さん、蔣蕾さん

後期から本学大学院商学研究科に3名の院生が入学しました。ともに昨年度本学に、中国山東大学威海校・煙台大学から交換留学生として来日し、今年3月に帰国したばかりです。帰国後卒業し、新たな志を抱いて半年後に再来日しました。3人は日本語科の学生としての交換留学を振り返り、さ

らに日本語を深く学びたいという意欲にかられたそうです。蔣蕾さん(写真右)は日本語だけではなく、日本への興味を更に深めていきたいと言います。将来的には中国において日本語を教える職に就きたいそうです。毛幸子さん(写真中)は、まだまだ日本や日本語に対する知識が不足で、難しく大変なことです。この大学院進学で多くを学び、日本での就職を希望しています。周唯さん(写真左)は交換留学時に商学について興味を持ちました。そのために大学院ではビジネス分野を選択しました。研究科修了後は、中国進出の日本企業で働きたいと考えています。

交換留学時に在学学生との交流も経験し、友人も多いとのこと。研究と共にさらに交流も深めて欲しいと思います。

新刊紹介



『ベーシック税務会計 [改訂版] <企業課税編>

中島 茂幸・櫻田 譲 編著
2014年9月20日/創成社
ISBN978-4-7944-1483-0 C3034

『ベーシック税務会計 [改訂版] <個人課税編>

中島 茂幸・櫻田 譲 編著
2014年10月20日/創成社
ISBN978-4-7944-1484-7 C3034

医務室から『二十代の健康』⑧ 医務室 二瓶 妙子

若者から中年、男女を問わず多くの人が抱えている腰痛。その腰痛に悩んでいる人は全国で1千万人もいわれています。そして、その80%以上が痛みを特定できないのだそうです。

腰痛が治りにくいのは、筋肉と腹圧と力学的バランスで上半身を支えている腰椎の構造的な問題に加え、加齢や運動不足による筋肉の衰えが大きな原因となって引き起こされると考えられてきました。しかし、いまだその確かな原因と治療方法は確立されてはいないのです。

そこで、近年解明されてきたのが、痛みをコントロールする脳のメカニズムです。物理的構造異常から心因性の痛みへと「痛み」への捉え方が変わってきました。特に慢性腰痛は、精神的ストレスが深くかかわっていることがわかってきました。

今回ご紹介する本は、電気メーターに勤務する技師が50歳の時に突然、左臀部や左足下部に激痛が出現し、座れない、立てない、歩けない、そして横になって眠れないなど、慢性の「坐骨神経痛」に苦しんだ7年間に及ぶ辛くも楽しい七転八倒の闘いの研究録です。

著者は、痛みを(痛みのループと表現)して捉えています。そして、「脳のリセットする訓練」、「良くなったイメージを持つ訓練」、脳を騙す「ミラー療法」の訓練、トリガーポイントブロック注射、硬膜外ブロック注射、高周波熱凝固治療、抗鬱剤の処方などのさまざまな治療方法を行いました。

著者は、専門家による文献書物は専門用語が飛び交い、難しい。患者が本当に知りたいことは、「なぜ慢性疼痛が発症したのか、なぜ痛いのか、なぜ治らないのか、どうすれば治癒するのか」だけである。結局慢性疼痛は自分自身の「心との闘い」でもあった。どうか痛みを苦しんで出口に辿り着けない多くの方々に少しでも役立つ情報になれば嬉しいですよとコメントしています。



『腰痛は脳の勘違いだったー痛みのループからの脱出』
戸澤洋二著/風雲舎

行事予定

平成26(2014)年	2/8日	一般入学試験
12/27日	2/20日	一般入学試験合格発表
平成27(2015)年	3/2日	卒業生発表
1/7日	3/4日	後期修学指導面談②(予定)
1/8日	3/18日	卒業証書・学位授与式(卒業生を送る会)
1/17日・18日	3/19日	学年末休業終了
1/24日・25日	3/23日	新3年次ガイダンス、 新2年次ガイダンス
1/29日	3/24日	新4年次ガイダンス
1/30日	3/24日・25日	新2年次履修登録
2/3日	3/25日・26日	新3年次履修登録
2/4日	3/26日・27日	新4年次履修登録
2/5日	3/30日	履修登録訂正日(全学年)